

話 型 の 力

『細雪』論

平野 芳 信

一

私はこれまで『細雪』について二度論じたことがある。しかし、それでもなお、この作品についてわからないことが幾つかあるといわざるをえない。いや、正確には『細雪』という作品は、論じれば論じるほど、新たな疑問を喚起される不思議なテキストというべきかもしれない。たとえば、野口武彦氏は次のようにいっている。

一つの作品を何年も経ってから読み返してみると、もちろん当り前の話だが、最初るとき気づかずに通り過ぎてしまったものの多さに驚くことがよくある。たしかに一度歩いたことのある道筋にはちがいないのだが、立ちどまって見る途中の景観が、以前とはだいぶ変っているのである。よくまあこんなに見落していたことよ、という気持ちにさせられる。この『細雪』がまさにそうであった。^①

とりあえず今回、本稿では以下の三点について考察する予定である。

一、『細雪』は谷崎最大の長篇であるが、なぜ彼がこれほど長い作品を書いたのか、あるいは書きえたのか。

二、雪子と四番目の見合い相手、橋寺との縁談がほとんどうまく行きかけるようにみえていたにもかかわらず、なぜ急転直下、あの有名な電話事件によって破談にならねばならなかったのか。

三、なぜ、雪子の結婚相手は現実のモデルと異なり、華胄の庶子でなければならなかったのか。

が、これらの疑問について考える前に、実はもう一点白状しておかねばならないことがある。それは私には、そもそもなぜ『細雪』が谷崎の最高傑作であると評価されているのかわからないということである。ところがその裏で、何度読んでもその時々面白さや発見に出会う、いわゆる再読に耐えうる作品であることも事実なのである。

二

そこで第一の疑問だが、これは最初一、二回を発表できただけで、その後、どこにも掲載の当てがなかったにもかかわらず、なぜあれほど長い間一つの作品に集中（執着）できたのかといかえた方が適切かもしれない。蓮実重彦氏は「あれは最初は連載小説で、後は発表のあてもなく書いていったものです。そのことか

ら、彼はある程度読者の実感というのを失ったような気もする⁽²⁾」と谷崎が読者を意識できなくなってしまうことが、あのような長さを招来したと指摘している。年譜によれば、連載が第二回で打ち切られた後、当時の「中央公論社社長の嶋中雄作と中学校の同窓生土屋計左右の経済的援助をうけて、続稿の執筆にはげむ⁽³⁾」とある。この記述を顔面どおりに受け取るなら、谷崎はこの一時期、締切にも経済的不安にも煩わされることなく生活していたことになる。

ところで通説では、谷崎は世間と隔絶し、超越した態度で『細雪』を書いていたといわれてきたが、果たしてその通りであろうか。たとえば同じように、新聞連載を圧力によって打ち切られた『痴人の愛』に取り入れられた、あの風俗描写を連想すれば想像が容易なように、彼ほど時代状況（流行）に敏感な作家はいなかったと思われる。それから推しても、あの時期谷崎は社会に常以上に関心を払い、アンテナを研ぎ済ましていたと考えた方が自然ではなからうか。

ちなみに、作品内現在では昭和十一年十一月から十六年四月二十六日までである。初出の連載第一回目が昭和十八年一月の「中央公論」であり、『源氏物語』の現代語訳の脱稿が昭和十三年九月、その刊行終了が十六年七月であることから類推して、おそらく作品の内的時間の終了時点が執筆開始時期とかなっていていると思われる。つまり、次第に泥沼化する戦況に無関心であることの方が、不自然なのかもしれない。それを証明するかのように、作品のいたるところに戦時下の痕跡が認められる⁽⁴⁾。小森陽一氏は先に引用した蓮実氏との対談で、『細雪』と同時代の新聞を合わせ読むという視点を提示し、「ある意味で言う戦時下における、天皇制

ジャーナリズムの報道システム、あるいはそういう一元化した言説の在り方に対する、わかる人にはわかる真っ向からの反旗をひるがえした小説だという気さえする。『細雪』の雪子を昭和天皇になぞらえてみるとかなり危ないことが見えてくる⁽⁵⁾」と発言している。

この雪子を天皇に見立てるという視点は、冒頭に掲げた第三の疑問に係わってくる。雪子のモデル重子の現実の結婚相手は「三つの場合」などで明らかのように、渡辺明という「藤原氏」ではなく「徳川氏」につらなる男性であった。ここでもなぜ雪子の結婚相手が、「藤原氏」の末裔だった点にこだわるのかというと、雪子と御牧の結婚式が昭和十六年四月二十九日つまり天長節であるからなのである。もちろん、モデルの重子と渡辺明のそれが同じ日であることは百も承知の上の話である。

三

ここで想起したいのは、円地文子氏が雪子の物語を『源氏物語』の玉鬘物語になぞられたことである。

私には『細雪』は『源氏物語』の中段、光源氏の栄華と玉鬘の結婚談を取扱った部分に似通ったニュアンスを持っていると思う。

玉鬘の物語というのは『源氏物語』の中でも桐壺、藤壺、紫ノ上系統の物語とは別のもので、競争相手の内大臣の隠し子を源氏がひそかに引取って自分の娘と披露する。その美貌の姫に帝をはじめ、多くの貴族が求婚する件で、ここには『竹取物語』のかぐや姫説話なども投影していると私は思っ

ている。

田地氏の見解を一步押し進めるかのように、伊藤整氏は『源氏物語』よりも『竹取物語』に類縁関係を見出している。

しかし、「源氏」よりも、日本の最も古い代表的な物語である「竹取物語」に一層よくこの作品は近似している。新しい書き方で書かれた「竹取」の再生であると言っている。

『竹取物語』は田地氏のように玉鬘物語のプレテクストであるが、物語研究においては、八〇年代そのものが引用論の視点からの『竹取物語』と『源氏物語』の再検討の暑い時代だったわけで、今それを視野にいれておく必要があるだろう。つまりここに、今回私が着目しタイトルにも掲げた「話型」論的視座を『細雪』論に導入する根拠が存するのである。

中古文学者の一人、島内景二氏は「話型」について、次のように定義している。

我々が日常用いる言語には文法がある。ふだん全く意識することはないのだが、文法という骨格によって形成されたのが言語行為なのだ。似たような意味で、文学作品を成り立たせている基本的骨格を話型という。(略)世の中には他人の空似ならぬ作品間の類似が頻繁にみられる。類似の印象は話型の一致によって得られたのである。複数存在する素材をどのような順序で配列し、どのような展開を示すのかを前もって決定している遺伝子のごときものが話型なのだ。(略)問題は話型が実在するかとか話型は誰が作ったのかとかというのではなく、話型を設定することで作品が発生した瞬間の作者内面のドラマをどの程度追体験できるかということなのだ。

誤解していただきたいのは、本稿でいう「話型」は島内氏の定義そのままではないことである。東原伸明氏は島内氏の「話型」研究の根底にはユングの集合的無意識風の話型概念があって、それゆえに静的で形式的な類似関係の指摘で満足している点に限界があるとして、次のように「話型」を規定する。

従来は類型学的に領導されてきた〈話型〉という分析概念も、今日においては引用論の範疇で論じられるべきであろう。(略)〈話型〉とは、〈カタドリ〉にはかななろう。そしてカタドルことは、つねに引用したプレテクストの中心をずらすこと、差異化することである。引用としての〈話型〉とは、プレテクストとしての〈話型〉にはかならず、プレテクストの無限のヴァリエーションの謂なのである。したがってここでも、カタ(類型)が問題なのではなくて、カタからのズレ(差異)が重要なのだ。(傍点原文)

高橋享氏もまた「話型」について「物語文学史の出発において、話型は物語の構造を成り立たせると同時に、それを主體的な表現のレベルで変形し解体する方向性を強く示している」という。

改めて本稿の意図を『細雪』というテクストとプレテクストとしての『竹取物語』との間の動的な関係、つまり差異を析出するための「話型」という観点の導入であることを確認しておきたい。その意味でたとえば、雪子が月の病に連動して目の縁にシミのる体質をもつことや、「上巻―二十二」で上京した本家に同行した雪子を月見の夜に忍ぶ場面などは、単純に月の世界の住人かぐや姫を連想させる。また「下巻―二十五」には、貞之助と幸子が奈良での旧婚旅行を南京虫で台無しにされ、そのためにもう一度富士山の間近のフジ・ヴィウ・ホテルに宿泊し旅行をやりなお

さねばならないエピソードがさりげなく挿入されている。類似しているということだけでいえば、『竹取物語』の最後でかぐや姫が地上に残した不治の薬を、他ならぬ富士山の頂上で灰にするエピソードにその起源の必然性が求められ、そこに「話型」という概念をはめ込むことが可能であると思われる。が、それだけでは十分ではないのである。

千葉俊二氏は、この旧婚旅行に幸子が向かう寝台列車の中で、彼女が家中のガラス製品が音をたてて割れる不思議な夢を見るシーンに着目し、

初読以来私には妙に気になり、印象に残るエピソードであるが、この長編小説の中にあつては特にどうのこうのと、とりたてて問題とすべき箇所でもないだろう。(略)が、このエピソードを読んだ時の印象は、このような解釈ではとても納得し得ぬ、もっと根本的な存在そのものに対する不安、⁽¹²⁾といって大袈裟ならば作品に内在する根元的な不安の表象といった感じを受ける⁽¹³⁾。

といっている。

作品内時間でいえば、それらは昭和十五年の六月から八月にかけての出来事であるが、現実には作者合崎がはじめてフジ・ヴィウ・ホテルに投宿したのは、現在同ホテルに残された資料から昭和十七年九月二十五日ということが確認できる。この現実の時間と虚構の作品内の年立ての相違には、あるいは最も本質的な意味で「話型の力」につながる何かがあるように思える。一ついえることは、このとき幸子と貞之助の間には一種の危機的状況が潜在し、それを打破するために旧婚旅行にでかける必要に迫られていたのではないかということであり、それが奈良ではなく、富士山の麓

で目的を果たすことができたという点に、書くことと話型のいまいかがたい関係を感じるのである。

書くとはどういうことなのか。書く営為の一回一回が、わが閉塞の日常を越え、作品の人生を識る努力、試みだったのではないかという気がする。書き手は蒙昧のこの世界、無明のわが人生に救済の目途もなく醒めさせられている一人間ではないかあるまい。物語の情動は、時代の最も繊細なる病者のごとき感受者の内奥の密室でほとんど物語の創作へ転化する。それは言われているような意味では救済から絶望的に遠ざかることにほかならなかった。物語というはかない営為のために一生を捧にふる覚悟とでもいうべきものは、当初の書き手、誕生期の作家にあるべきはずのものでない。それは物語がさせるのだ。ここにおいて物語は書き手から超出して彼方にあるなにかである。物語が書き手を振りまわし、追いつめてゆく。憑かれた書き手にもはや逃れよう術はなかった。⁽¹⁴⁾

(傍点引用者)

この引用は藤井貞和氏のものであるが、私見では氏がここで「物語」という用語で指し示しているものを、「話型」といいかえたい誘惑にかられる。いうまでもなくそれは、本稿における「話型」なる概念が、ユング的な集合的無意識ではなくラカン的な無意識を前提にしているからである。ラカンによれば、我々の主体は一個の統一体ではなくむしろ分裂しており、無意識は言語のような構造をもち、他者の言葉によって構成されているのであるという。つまり我々の主体も無意識も、いわばテキストのように引用の織物であるというわけなのである。

作品を書く際多かれ少なかれ、作家はあらかじめ自己が紡ぎ出

そうとしている虚構の世界全体を、完全には把握しえていないはずである。もちろん作家によっては、結末まで決定した上で、執筆を始めることもあるだろう。しかし我々が主体と呼び、無意識と呼ぶものが他者の引用によって構成されている以上、自身がオリジナルなものとして信じ、書こうとしている作品には何らかの形で、プレテクストが存在し、それを反復引用しているにすぎないのである。おそらく多くの場合、作家はある構想に基づいた漠とした予感なり直観なりに導かれて、作品の運行を進めるのだらう。そのとき、とりあえず彼らは意識的なストーリーの展開——たとえばそれに現実の出来事や実在のモデルというような依拠するものがあるうとなかろうと——にしたがって、各場面の描写に専念する。そうしているうちに、いつしか彼が描き続けた場面の連続体としてのストーリーの中に、一連の必然性としてのプロット（因果の鎖）が生まれていくのである。それは作家が意識的に生み出している場合もあるのだが、同時に識閥下では先行のプレテクストをそれと知らず引用しているともいえるのである。そのとき、プレテクストとテクストの間には、「話型」という共通項が認められるのである。それはユング的な、アプリアリな共通項としての話の型ではなくて、あくまでもラカンの意味で、引用されたところの話の型なのである。

四

それならばここで「話型」という概念を『細雪』という作品の解釈に導入すると、いったい何があぶりだされてくるのであろうか。『竹取物語』には、その成立に際して好むと好まざるとにか

かわらず、抱え込まねばならなかった命題があるという。それはこの世の最高権力としての天皇制との関係である。ここに至って我々は、二重の意味で「話型」の力を認識せずにはいられない。なぜなら、谷崎はこの『細雪』を書き始めるまで、『源氏物語』の現代語訳に携わっていたのであり、『源氏物語』こそ、王権への侵犯がその深部に胚胎していた、いわばきわどい作品であったからなのである。

渡部直己氏は「雪子と八月十五日——『細雪』を読む」の中で、八月十五日をはさんで時局は急転し、われわれの歴史は未曾有の激変を体験するにもかかわらず、『細雪』は依然、時流に超然と書き継がれたと人はいう。だが、そうであるなら、谷崎は「物書き」ではあっても「作家」ではあるまい。たとえどれほど意識的にそこから身を背けようとも、たぶん背けば背くほどかえって強く、現実と触れあってしまう者。「作家」とは、そうした倫理の、愚直で時に理不尽なほど生々しい形式において、虚構に加担する者の別称にほかならぬとすれば、谷崎はまぎれもなくその種の存在である。

と作家谷崎の本質を規定し、テクストとしての『細雪』の中に八月十五日の痕跡を見出している。その結果導き出された敗戦の裂け目は、「下巻—五」から「七」の間のどこかということであったが、本稿にとって重要なのは、谷崎の「疎開日記」の八月十五日における現人神の肉声に関する記述と「下巻—十七」のあの電話事件の際の雪子の地声に関する描写のあからさまなまでの酷似なのである。

八月十五日、晴

（略）十二時天皇陛下放送あらせらるとの噂をきき、ラヂオ

をきくために向う側の家に走り行く。十二時少し前までありたる空襲の情報止み、時報の後に陛下の玉音をきき奉る。然しラヂオ不明瞭にてお言葉を聞き取れず、ついで鈴木首相の奉答ありたるもこれも聞き取れず、たゞ米英より無条件降伏の提議ありたることのみは聞き取り得、〔疎開日記〕散々待たして漸う出たには出たけれども、御都合は如何ですと云つても、はいあのう、はいあのうを繰り返すばかりで、イエスだかノーだかさっぱり分らない、問ひ詰めると聴き取れないやうな細い声で、ちよつと差支へがございますので、……と、やつとそれだけ云つて、あとは一言も云はない、

〔下巻一十七〕

現実のモデルが実際に経験したエピソードをなぞっているうち、テクストの内実はいつしか「竹取」の話型に接近していたのだ。作者谷崎がそのことに気づき始めたのは、あるいは幸子と貞之助の旧婚旅行のエピソードを書きつあるときかもしれない。が、やはり決定的だったのは玉音放送に遭遇することだった。その段階で、進行しつつあった橋寺との縁談が急遽捨てられ、あの華胄の庶子との縁談が浮上してきたのだ。冒頭に掲げた第二の疑問は、プレテクストとしての『竹取物語』を想定してはじめて説明できるのであり、同時に、御牧がなぜ京都の貴族の末裔なのかという第三の疑問も、これで説明可能な気がする。つまり描写の連鎖としてのストーリーが、「竹取」の話型とリンクすることにより、『竹取物語』がああ時代に内包していた天皇制と切り結ぶコンテクストを『細雪』も獲得してしまったための結果だったのである。

『細雪』は全体としてみれば、「上巻」は雪子の巻、「中巻」は妙子の巻といった様相を呈している。「下巻」において、雪子と妙子の物語はいわばメリーゴーラウンドのように、あるいはフーガの二つの主題のように、一方が作品の表層に浮かび上がってくると、もう一方は光に対する影のように作品の低音部（背景）に姿を消す。いや姿を消すというよりも、前面で展開するエピソードを補完するかのようには後景にあって、読者にその存在を常に暗示しつつアピールしている。この二人の人物の関係はいかなるものなのであろうか。

次の一文は『細雪』論において、頻繁に引用されるものである。先づ身の丈からして、一番背の高いのが幸子、それから雪子、妙子と、順序よく少しづつ低くなつてゐるのが、並んで路を歩く時など、それだけで一つの見物なのであるが、衣裳、持ち物、人柄、から云ふと、一番日本趣味なのが雪子、一番西洋趣味なのが妙子で、幸子はちやうどその中間を占めてゐた。顔立なども一番円顔で目鼻立がはつきりしてゐ、体もそれに釣り合つて堅太りの、かつちりした肉づきをしてゐるのが妙子で、雪子はまたその反対に一番細面の、なよ／＼とした瘦形であつたが、その両方の長所を取つて一つにしたやうなのが幸子であつた。

〔上巻一七〕

この有名な蔭岡三姉妹の形態上の特徴は、一体共通点を読者の前に示しているのであろうか。逆に差異の強調なのだろうか。私見によれば、これこそこの姉妹がある一つの鋳型から鋳造された、別々の個性であることの証左なのではないだろうか。ただ留意す

べきは、その事実がただ単に「兄弟」という設定であるから当然だという意味のレベルでとらえてはならないことである。換言すれば、物語内容ではなく、物語言説のレベルでとらえるべきではないかということなのである。

あらかじめ答を先取りしておけば、少なくとも蒔岡の姉妹たちの作品における存在のなされ方は、言語の意味論的な位相とは別に統辞論的な位相でとらえるべき関係なのではないかということである。つまり「雪子」と「妙子」のストーリーのリアな線上における役割の差異は、範列的なそれにすぎないのではないかということなのである。やや極言すれば、雪子と妙子をそれぞれ主人公とする形で繰り広げられる二つの物語は、いってみれば主人公の位置を交換しても成り立ちうるものかもしれないのだ。作品冒頭で、雪子が三十歳にもなって未婚である理由の一つに、妙子と奥畑の墮落事件が大阪のある小新聞に雪子の名前で誤って出てしまったことが挙げられている。それが雪子の未婚のかなり決定的な要因であるところが重要なのだが、この出来事が意味しているのは、二人がその後経験したさまざまな物語が、選択の如何によつては、限りなく交換可能なものであったということではないだろうか。¹⁶もちろん、二人の性格が正反対であるという表層での差異の提示は、雪子は雪子の物語の主でしかありえず、妙子は彼女自身の物語をしか生きられないことを明示している。

たとえば、「中巻―四」から「九」にかけて妙子が生死の境をさまよひ、写真師板倉によってからくも危機から脱し、その後彼と恋に陥る契機となるきわめて重要な阪神大水害のエピソードがある。このとき雪子は偶然東京の本家に滞在していたため、大災害を経験してはいない。しかし、「中巻―十六」で東京において、

悦子の神経衰弱に治療のために上京した幸子たちとともに、雪子は台風遭遇する。このとき妙子はその場には居合わさない。その直後、奥畑からの手紙が幸子のもとに届き、妙子と板倉の関係が作品の表層に現れることになるのである。妙子の巻としての「中巻」のメイン・プロット、板倉との恋物語を決定づける自然災害に遭うのは妙子その人以外には考えられないである。しかし、「それから、どうした(and then)」としてのストーリーの展開の中で、代替可能なもう一つの物語の主人公、雪子も妙子の経験に対応するかのようになり、確かに台風という自然の脅威に晒されるのである。この台風によって幸子は築地の浜屋に移り、浜屋の住所の知っていた奥畑からの手紙を受け取るというプロットの必然が生ずるのである。つまり妙子の物語(構文)は、連辞的に妙子を主人公(主語)とするしかないのだが、それとパラレルな位相でもう一人の主人公雪子も、表層的な意味のみが異なる、構造が同じ構文(物語)の主格として機能しているのである。

この後、「下巻―二十八」で「満州国皇帝のお附」に奥畑を応募させ、それによって別離を決定づけようとする妙子に対して満州まで彼についていくことを主張する雪子の口論は、二人の説話がここで明らかに葛藤状態にあることを示唆している。細谷博氏は妙子説話が雪子説話を侵犯しているとさえ解釈しているが、もしそうだとしたら、それこそ『細雪』は、『竹取物語』のもう一つ話型をも踏襲している(もちろん結果として)といつて良いであろう。妙子はこの段階で完全に制度としての家の管理から解き放たれ、下層階級に属する三好と結ばれようとしている。それは戦後の社会では価値のない貴族の裔との結婚を選び採ろうとしている雪子に対する、明かな批判でもあったからである。つまり

『竹取物語』研究で従来しばしば指摘されているような、結婚拒否の物語の話を包摂しているわけである。しかし繰り返しになるが、そのことをここで指摘することはさして重要ではない。

なぜなら、妙子も三好に「もらわれていく」からである。妙子の説話は雪子の説話と交換可能という意味でのみ「結婚拒否」の意味を紡ぎ出せるが、雪子が一種の神への貢ぎものになるのと同じようにやはり最終的には、男の支配下におかれるしかないのである。たとえばそれは表層のレベルでは女の自立の物語に見せかけながら、構造のレベルでは彼女らはついにイニシエーションを遂げることを許されてはいない『痴人の愛』『春琴抄』と何ら変わらぬもののように見えるのである。あるいはこういいかえても良いかもしれない。かつて谷崎は『吉野葛』において物語の宝庫に取材の旅にでながら、ついに友人の母恋の物語の聞き書きを書くことで事足りたという腑抜けのような作家を登場させ、まふと古代人のいうモノガタリとの接近遭遇をやり過ごしたことがある。同様に『細雪』では受動的ではあったが、とにかく「結婚拒否」とも「王権への侵犯」とも呼びうる可能性をもった『話型』を内包する雪子と妙子の物語を、自らその可能性のまま封印しようとした作家谷崎の姿があると一応はいえようか。

どちらにしても結果として、谷崎は八月十五日を待っていたのである。「待っていた」と表現することは、正確ではないかもしれない。おそらく最初から『細雪』という作品は、雪子の結婚式で大団円を迎えるはずだったからである。ところが現実には谷崎は、徳川家の末裔と結婚した義理の妹にまつわる素材を作品化しながら、読者を失い、締切を失い、さらには経済的不安という緊張感さえ失って、〈初め〉と〈中〉の無限の往還運動という迷宮

をさまよっていた。そして現人神の肉声に接したとき、ついに〈終わり〉への出口を発見したのである。それは『竹取物語』に起源をもつ話型に選ばれたことの半ば意識的半ば無意識的自覚であり、ストーリーをその〈終わり〉に向けて始動させることのできるモメントとの幸運な出会いだったのである。

近代のかぐや姫雪子はかくして光に包まれて昇天する。

それにどうしたことなのか数日前から腹工合が悪く、毎日五六回も下痢するので、ワカマツやアルシリン錠を飲んで見たが、余り利きめが現れず、下痢が止まらないうちに廿六日が来てしまった。(中略)下痢はとうとうその日も止まらず、汽車に乗つてからもまだ続いてゐた。(「下巻―三十七」)

光の暗喩としての汚物は、意味論的な負の方向性によって、あまりに谷崎的とさえいえる。が、それ以上に重要なのはそれが神の子の死産ないしは流産のメタファーでもあることなのだ。¹⁸雪子が決して喜び、自ら望んで御牧との式に望んだのではないことは作品中での語り及び作者の証言(「三つの場合」)によって明らかだが、しかしその構造としての話型レベルでは、どう読みとるべきなのだろうか。初稿の段階では最後に雪子が姉幸子が結婚する際に詠じた「けふもまた衣えらびに日は暮れぬ嫁ぎゆく身のぞる悲しき」という和歌を回想するシーンで終わっていた。¹⁹

作中に歌を引用することそれ自体が、アプリアリな意味で「型の力」なのであり、『細雪』を谷崎の最高傑作と人をして呼ばしめるゆえんといっているものかもしれない。しかし谷崎はそこに現在のような雪子の下痢のシーンを織り込んだ。先ほど「一応」と留保をつけておいたのはこの意味においてである。それは「話型」によって引用されたプレテクストを脱構築せずにはおかない、

作家のパラディグマ軸上での選択が発動した結果であり、それこそ芸術家の宿命というべきものである。

注

- (1) 「解説 美―栄華から『ほろび』にいたる『時間』の相のもとで」 小田切進編『日本の文学74 細雪(下巻)』S 60、85・5 ほるぷ出版 619頁
 - (2) 「対談 谷崎礼讃―闘争するディスクール」『国文学』第38巻第14号 H 5、93・12 学燈社 27頁
 - (3) 「年譜」『愛読愛蔵版 谷崎潤一郎全集 第二六巻』S 58、83・11 中央公論社 323頁
 - (4) いわゆる私家版の「上巻」には現行テキストに移行する段階で削除されたキリレンコの家での貞之助の時局への認識を示すあの有名なシーン(A)があり、現行テキスト中には、以下のように少なくとも二五カ所の時局がらみの記述(B、W)が認められる。
 - (A) 「さあ、……何か、新聞に書いてあつたゞけではなさうな気がしますけれども、……しかし此の間の南京の三中全会ですか、あれで見ると、国民政府は赤化を根絶すると云ふ決議案を可決してゐるぢやありませんか」
 - ウロンスキーは、貞之助の云つたことをもう一度キリレンコに露西亜語で聴かして貰つてから云つた。
 - 「おゝ、あれ嘘、……あれ、日本欺すため、……」
- 「支那の共産党は当分の間、支那を赤化することは止めたんですよ。そして国民政府と妥協して、蒋介石をおだて、

日本と戦争させようと考へてゐるんですよ。それが第三インターの指令なんですからね」

と、キリレンコは、時々ウロンスキーの意見を質しながら続けた。

(B) 我が艦上機が汕頭と潮州を空襲した記事を読んでみると、

(C) 近頃は、目下の支那事変の発展次第では婦人が銃後の任務に服するやうな時期も有り得べく、そんな場合を考へると、これからの女子は剛健に育て、置かなければ物の役に立たないと云ふことを、憂慮するやうになつてゐた。

(「上巻―二十四」)

(D) 至る所に堆積してゐる土砂の取り片付けだけは、事変のために人手や貨物自動車が不足してゐる折柄で、早急には運びやうがなく、

(「中巻―十」)

(E) 応接間の長椅子や安楽椅子の重いのを、四人が、りで彼方此方へ動かして繋ぎ合せたり積み重ねたりして堡壘や特火点を作り、空気銃を擬してそれを攻撃する。

(「中巻―十一」)

(F) 彼女は近頃世界の視聴を集めてゐる亜細亜と欧羅巴の二つの事件、――日本軍の漢口進攻作戦とチェッコのズデーテン問題、――の成行がどうなるであらうかと、朝な夕の新聞を待ち兼ねるくらゐにして読むのであるが、

(「中巻―十七」)

(G) その後独逸と英仏との関係は、去る九月末のミュンヘン会議以来表面小康を保つてゐるけれども、決して相互が真の諒解に到達したのではない、英国はまだ戦備が整つ

てゐないので、一時独逸を油断させるために妥協したに過ぎず、独逸も亦英国の意図を察してその裏を掻かうとしてゐるから、戦争は必ず近いうちに起ると云ふので、

〔中巻―二十三〕

(H) 国民精神総動員などが叫ばれてゐる今日、(中略) 欧州戦争が勃発してから又兄さんの考が変わり、日本もいよく大変なことになるかも知れない、日華事変が三年越し片付かないところへ持つて来て、悪くすると世界的動乱の渦の中へ捲き込まれるであらう、

〔下巻―一八〕

(I) 男たちの多くは欧州戦争のことを話題に上せた。

(中略)

「さうかて、ゆつくり過ぎますやないか」

「阿保らしい。『今からでも遅うない』云ふことがありませんがな」

(中略) と、国防服の上衣を脱いでワイシャツ一つになつてゐる塚田が、

「戸祭君々々々」

と、向う側から呼びかけて、

「君は近頃、株で大層儲けはつたさうやおまへんか」

と、真つ黒な顔に金齒を光らせながら云つた。

「違ひまんが。此れから大いに儲けようと云ふところだんが」

「何ぞえゝことがおまんのか」

「僕、今月中に北支へ行きまんねん。実は妹が天津のダンスホールに出てましたら、軍部に見込まれてスパイになりましたん。――」

「ほうお、――」

「そして今では支那浪人の奥さんになりをつて、えらい羽振りがようて、時々国元へ千円二千円と送つて来まんねん。」

〔下巻―一十〕

(J) 此の間或る人の出征を祝ふ歓送会の席上で紹介されたので、

〔下巻―十三〕

(K) 「どうも昨今は、酒も料理もだんく窮屈になつて来ましたが、此処の家はいつもこんなに御馳走が出るんでせうか」

〔下巻―十四〕

(L) 此の頃戦争の影響でプロントジールの錠剤や注射液が時々切れて困ることがある、

〔下巻―十五〕

(M) もうその時分、街でタキシードを拾ふのはむづかしくなつて来てゐたので、橋寺は電話で何処かのガレーヂからパッカードを呼んだ。

〔下巻―十六〕

(N) 事件は昨日だけでなく、一昨日から萌してゐたのである、一昨日、橋寺氏父子はあなた方に招かれて神戸の菊水で会食されたと云ふことであるが、その帰りに皆さんで元町を散歩された時、偶然橋寺氏と雪子お嬢さんとが二人だけになつたことがあつた、それは出征軍人を送る街頭行進か何かであつて、二人だけが長い行列に遮られて外の人達と離れてしまつたのであつたが、その時橋寺氏は、ある雑貨店の飾窓が眼に付いたので、僕、靴下を買ひたいんですが、一緒に行つて見てくれませんか、雪子さんに云つた、すると雪子さんは、はあ、と云つたきりモジモジして、半丁ばかり後になつた奥さん達の方を、救ひを求めるかのやうに何度も振り返つて見たりして、困つたやうな顔

つきで衝つ立つてゐるばかりなので、橋寺氏は憤然として、独りでその店へ這入つて行つて買物を済ました、これは十五分か二十分間の出来事で、外の人は知らないのであるが、橋寺氏としてはその時も相当不愉快であつた、

〔下巻一十八〕

(O) 妙子は事変が始まつて人々が指輪を嵌めるのを遠慮するやうになつてから、

〔下巻一二十三〕

(P) もうその頃は貴重品になつてゐたバアガンディーの白葡萄酒を、乏しくなりかけた貯蔵の中から特に一本選んで来、

〔下巻一二十四〕

(Q) 今年は時局への遠慮で花見酒に浮かれる客の少いのが、花を見るには却つて好都合で、平安神宮の紅枝垂の美しさがこんなにしみじみと眺められたことはなく、人々が皆物静かに、衣裳なども努めて着飾らぬやうにして、足音を忍ばせながら花下を徘徊する光景は、それこそほんたうに風雅な観桜の気分であつた。

〔下巻一二十四〕

(R) そんな間に、欧州の戦争は驚天動地の發展を遂げて、五月には独軍が、和蘭陀、白耳義、ルクセンブルグ等に進撃してダンケルクの悲劇を生み、六月には仏蘭西が降伏してコンピエーニュで休戦協定が成立すると云ふ有様であつた。

〔下巻一二十五〕

(S) その日の昼に防空訓練があり、生れて始めてバケツのリレーに駆り出されたので、その疲れが残つてゐたせるか、とろ／＼しながら頻りに防空訓練の夢を見ては覺め見では覺めた。

〔下巻一二十五〕

(T) 幸子は、夫が昨今或る軍需会社に関係し出してから

彼女も懐工合がよく、家計の方も大分ゆとりが出来るやうになつてゐたので、

〔下巻一二十六〕

(U) 実は今度、満州国の役人が日本へ来て、満州国皇帝のお附になる日本人を二三十人募集してゐる。お附と云つても式部官だの侍従だのと云ふ高級官吏ではなく、単に皇帝の側近に仕へて身の周りの世話をするボーイのやうなものであるから、智能や学問はどうでもよい。たゞ素姓のはつきりしてゐる者、ブルジョア育ちの、容貌が端正で儀礼や身嗜みの心得のある者、と云ふことなので、つまり上品な坊々でさへあれば頭は少しぐらゐる低能でもよい、と云ふのであるから、全く啓ちやんに持つて来いの口なのである。

〔下巻一二十六〕

(V) 井谷の友人の中には、今は世界的動乱の最中でもあり、亜米利加と日本との間にも事が起りさうな懸念があるから、もう少し時機を待つたらどうか、と云つてくれる人もあるけれども、

〔下巻一二十七〕

(W) 今月から来月へかけて東京は二千六百年祭その他で、

〔下巻一二十八〕

(X) 観艦式の明くる日が、大政翼賛会の発会式、それに靖国神社の大祭も始まつてをりますし、廿一日には観兵式もございますし、今月の東京は大変なでございますのよ。

〔下巻一二十九〕

(Y) それに近頃は、本家が虎の子のやうにしてゐた動産の大部分が、株の値下りで殆ど無価値に等しくなつたと云ふことなので、

〔下巻一三十一〕

(Z) 現に雪子の色直しの衣裳なども、七・七禁令に引つ

懸つて新たに染めることが出来ず、小槌屋に頼んで出物を捜させたやうな始末で、今月からはお米も通帳制度になったのであつた。〔下巻一三十七〕

(5) 前掲「対談」(注2) 26頁

(6) 「谷崎文学の女性像」『近代文学鑑賞講座第九巻 谷崎潤一郎』S 45〈70〉・10 角川書店 273頁

(7) 「『谷崎潤一郎全集』解説」『谷崎潤一郎の文学』S 50〈75〉・10 中央公論社 186頁

また伊藤氏の「谷崎潤一郎の芸術」(前掲『谷崎潤一郎の文学』)の中にも同趣旨の発言がある。

なお管見にはいった『細雪』と玉鬘説話との関係を指摘した先行論には以下のようなものがある。

野口武彦「『細雪』とその世界」『谷崎潤一郎論』S 48〈73〉・8 中央公論社

秦恒平「夢の浮橋」『谷崎潤一郎―源氏物語―体験―』S 51〈76〉・11 筑摩書房

(8) 小林正明「竹取物語研究史の現在―方法論的な水準において」『国文学』第38巻第4号 H 5〈93〉・4 学燈社 参照

(9) 「王朝物語述語・話型事典」『別冊国文学』S 62〈87〉・9 学燈社 86頁

(10) 「竹取物語の引用と差異―話型」のカタドリもしくは旧話型論批判―『日本文学』第39巻第5号 H 2〈90〉・5 日本文学協会 1頁

(11) 「前期物語の話型」『物語と絵の遠近法』H 3〈91〉・9 ぺりかん社 237頁

(12) 「『細雪』論」『解釈と鑑賞』第52巻第4号 S 62〈87〉・4 至文堂 137頁

(13) 「物語のために―わが物語学序説」『源氏物語の始原と現在』S 55〈80〉・5 冬樹社 21頁

(14) 「谷崎潤一郎―擬態の誘惑」H 4〈92〉・6 新潮社 一六八頁

(15) すでに塩崎文雄氏(『年代記』の制覇―『細雪』の側面「日本文学」第36巻第12号 S 62〈87〉・12 日本文学協会)と井上諭一氏(『シンポジウム『細雪』―病の時空―「国語国文研究」第87号 H 2〈90〉・12 北海道大学国文学会)によって、『細雪』と天皇制との関係が指摘されているが、本稿とは視点を異にしている。

(16) 音(「ユキ」と「サチ」)からいえば、「雪子」と「幸子」さえ交換可能であるが、あえてここでは触れない。

(17) 「『細雪』大尾―「持続」と「収束」―」『昭和文学研究』第27集 H 5〈93〉・7 昭和文学会 参照

(18) この点に関しては拙稿(『「細雪」再論―西洋と日本のはざま―』『日本文芸論集』第15・16合併号 S 61〈86〉・12 山梨英和短期大学日本文学会)で論じたことがある。

(19) 「芦屋市谷崎潤一郎記念館会館記念展「谷崎潤一郎・『細雪』そして芦屋」図録」S 63〈88〉・10 芦屋市・市教育委員会 参照

《付記》

本稿における谷崎作品の引用は、すべて『愛読愛蔵版 谷崎潤一郎全集』(中央公論社)に拠り、必要と認めたもの以外のルビ

は省略し、旧字体は新字体に直した。また本稿は、『表現研究』第60号（H 6〈94〉・9 表現学会）に発表した同名論文と論旨をほぼ同じくするが、『表現研究』では紙数の制限があり、意を尽くせなかったので、加筆しあえて「山口国文」にも掲載させていただいた。

（ひらの・よしのぶ）